

『ベーリングの大探検』から見える話

奥 正敬

■はじめに

北極海に沿ってシベリアとアラスカを隔てるベーリング海峡。ヨーロッパの地理学研究者や地図作製者は18世紀に入ってもこの地域が描けないことに苛立ちを覚えていました。

このような中、ロシア皇帝ピョートル1世（Пётр I, 1672-1725）はデンマーク出身の海軍士官ヴィトウス・ベーリング（Vitus VERING, 1681-1741）を隊長とした探検隊を派遣しました。

この探検は二度にわたって行われますが、第2次探検でベーリングの副官を務めた航海士ワクセル（Sven WAXELL, 1701-1762）の手記『ベーリングの大探検』からは、日本の徳川幕府を驚嘆させた事件の真相が明らかになります。

■ロシアの近代化を追求したピョートル1世

本書には、ピョートル1世は1716年に滞在していたフランスで、同国の学士院からシベリアから北部アメリカに至る地図の作成についての依頼を受けていたことが書かれています。

ピョートルは1682年に第2皇帝に即位し、1696年にはロシア初の艦隊を組織してトルコのアゾフで勝利しました。同年、第1皇帝イヴァン5世の崩御で単独の治政になると、ロシア暦からユリウス暦への変更、文字の近代化、服装の西洋化、新聞の発行など、科学技術と文化を振興しながら国家の近代化に取り組みました。

また、1700年からはバルト海の覇権を巡り、スウェーデンとの間で北方大戦争を始め、1703年にはフィンランド湾最東部沿岸で新首都サンクトペテルブルクの建設に着手しています。一方ではシベリアへ目を向け、この地への植民を活発化させようとしていました。

さらに、1721年に22年間に及んだ大北方戦争で勝利すると、フランス学士院から求められていた地図の作成に臨みます。これに先立ち、1720年からはドイツ人学者が率いるシベリア調査隊を派遣していました。続いて、カムチャッカ探検隊を組織して操船技術に長けたベーリングを隊長に任命したのです。

■ベーリングと第1次カムチャッカ探検隊

このピョートルの命を受けたベーリングは、

デンマークのユトランド半島東部の海岸沿いの町ホアセンスで産声をあげました。彼が生まれた1681年は、ピョートルが第2皇帝に即位する前年にあたります。ベーリングはオランダ船に乗り組んで東インドを訪れた経験などをもとに、操船技術を高めたとされます。1704年にはロシアの外国人招聘に応じて海軍に入隊し、士官として軍功を重ねたようです。

1725年2月にベーリングは約50名を率いてサンクトペテルブルクを出立しますが、その年の8月にこの探検を命じたピョートル1世が逝去したのです。しかし、ベーリングはシベリア横断を続けて、19ヶ月をかけ1726年9月にオホーツクに到着し、船舶を作って北極海への入口デジネフ岬に到達します。しかし、明らかに海の向うにあると思われる東方の陸地（アラスカ）の調査ができず、1730年に不十分な結果を携えてサンクトペテルブルクへ帰還しています。

■第2次探検隊の必要性和その目的

この頃、ロシアのシベリア植民を一層推進させる意味からもカムチャッカの情報が必要とされ、第2次探検隊の派遣が求められていました。こうしたことから、ベーリングは志願して再び隊長の任に就き、1733年に外国人を交えた学者や技術者、画家など500人を率いて出発します。さらに途中から地方総督の支援で加わった荷夫なども併せると、一時は2,000名に及んだとされています。

本書の著者ワクセルは詳細な記録を残そうとしていますが、章立てや構成などは体系付けられたものでなく、「手記」の域を出ない内容に留まっています。従って、探検目的やその設定過程などの論理的表現はなく、目的の確認については各章に書かれた「目標」に頼るほかありません。

その第1目標には北氷洋よりカムチャッカや太平洋に出る北東航路の開拓を挙げています。続いて第2目標では、日本へ達する航路の開発と日本国土とカムチャッカの地理的關係の調査が求められています。さらに、第3目標はカムチャッカからアメリカへの進航になっています。

この3つの目標とピョートルが派遣した第1次探検の目的を比較すると、第1次探検には第2次の第1目標と第2目標に相当するものはなく、唯一あるのは第3目標のアメリカへの進航の基盤となる「カムチャッカの探検と調査」だけです。